慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	1840年1月22日まで (中編) : メトレの誕生 (3)
Sub Title	Avant le 22 janvier 1840 (2) : la naissance de Mettray (3)
Author	岑村, 傑(Minemura, Suguru)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	2023
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.124, (2023. 6) ,p.198 (63)- 210 (51)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-01240001-0198

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

1840年1月22日まで（中編）――メトレの誕生（3）

岑村　傑

ヨーロッパへ

農業によって少年たちを救済する施設というドゥメスの夢が一気に具体化していくのは、1838年のことである[1]。アメリカの監獄巡歴から帰国した翌年となるその年、自身が副会長を務めていたセーヌ県青少年出所者更生保護協会からの依頼を受けるというかたちで、ドゥメスは、今度はヨーロッパ諸国ですでに稼働していた農業コロニーの視察に出る。

その歴訪の目的は、第一に、他国が犯した失敗に学ぶことだった。視察隊は、オランダとベルギーの農業コロニーが不調であることを承知のうえで、そこに向かう。

> オランダのコロニーの生活は沈滞しきっていて、多大な犠牲を払って貧弱な成果しか得られておらず、ベルギーのコロニーはさらに惨憺たる結果でした。わたしたちが両国に赴いたのは、したがって、そこに手本を見いだそうというのではなく、教訓を得ることができるだろうと考えていたのです。正しい道を示してくれる者ばかりではなく、陥穽を教えてくれる者からも、同じく恩恵をこうむるものです[2]。

ドゥメスがオランダの沈滞とベルギーの惨憺から得た何よりの「教訓 leçon」は、立地の重要性である。機能不全にあえぐ施設はいずれも、ヒースなどの低木がはびこる荒原に建てられていた。不毛の地での耕作は、徒労であり、摩耗であり、すなわち罰でしかない。苦役が生長や満開や豊作を見るよろこびで報われな

いのならば、「良い働き手の意気を挫き、悪い人間たちには怠惰にふける口実を与える[3]」だけだろう。「劣悪な土地を劣悪な意志に委ねれば行き詰まる[4]」ことを、ドゥメスは肝に銘じたのだった。

しかし、前人の轍を踏まないようにするためとはいえ、失敗例を積み上げるばかりでは、そもそも自分がしようとしていることは実現可能なのか、という疑念が募ることになる。農業施設による心身復活が「実践を拒むユートピアなどではない[5]」のならば、それを実証してくれる成功例がどこかに存在しているはずではないか。それを探しだすことがドゥメスのヨーロッパ視察の第二の、そしてより切実な、目的である。はたして、オランダとベルギーに続いて訪れたドイツで、それは見つかった。

> 視察旅行はハンブルクで終わるのですが、わたしたちはそこでついに、わたしたちが検討することを任された問題の答えを、迷わず言いますが、その答えを、見いだすことになりました。ホルン村の近く、肥沃で明媚な土地の、エルベ川とビレ川の美しい渓谷を望む丘の斜面で、わたしたちは矯正学校ラオエ・ハウスを訪問する機会を得たのです[6]。

そこには、気を塞ぐ荒涼ではなく開かれた風光が、干からびた砂ではなく河川で潤う土が、「教訓」ではなく「手本 modèle」が、あった。

ヴィヘルンのあばら家

プロテスタントの牧師ヨハン・ヒンリッヒ・ヴィヘルン Johann Hinrich Wichern (1808-1881) は、ハンブルクに生まれた[7]。15歳のときに父を亡くしてからは辛酸を嘗めるが、周囲の牧師たちの後押しによって、ゲッティンゲンやベルリンで神学と哲学を修める。1831年9月にハンブルクに戻って貧しい子どもたちのための日曜学校の教師となると、生徒の家を訪問する活動が、ヴィヘルンに労働者階級の悲惨な現実を突きつけることになった。ヴィヘルンは訴える。

> そこにあるのは、物乞いと浮浪の子どもが育っていく場所であり、家庭です。その家庭こそ、悪徳と下劣と犯罪を植え付ける学校だと言わなければ

なりません。それこそが、ひとりからひとりへと伝播しながら、無信仰や、背徳や、下層階級自身とわたしたち皆にのしかかる貧困を、生む土壌なのです[8]。

退廃に蝕まれ、汚辱で蝕む家から子どもを引き離し、別の家に迎えなければならない。ヴィヘルンはそう決意し、救護施設の設立を模索する。篤志家が彼に、自分の所有地にある藁葺きの小屋と広い庭園を提供してくれた。傾きかけたその小屋は、昔から「あばら家 Rauhe Haus」と呼ばれていた。1833年11月からヴィヘルンはそこで暮らし始め、不幸な境遇の子どもたちを招じ入れる。まず3人が来た。その年の末までには、5歳から18歳までの12名が集まっていた。のちにヨーロッパ随一の名声を博すまでになる児童教育施設ラオエ・ハウス Rauhe Haus は、そのようにして始まったのである。

ドゥメスに、「端的に、ホルンの施設は完璧な成功だった[9]」と言わしめたラオエ・ハウスの仕組みを要すると、このようになるだろう。

児童は12人ずつの「家族」に分かれ、それぞれをひとりの家長が統轄し、補助として女性管理者1名がいる。各家族は自分たちで小さな家を建て、そこで暮らしている。全部で4軒の家が小集落をなし、そこで子どもたちは農作業や職人仕事に勤しむ。教育は道徳教育であり、宗教教育である[10]。

ドゥメス自身の言葉で繰り返すなら、そこに揃っていたのは、「精力的な、弛まぬ労働」と、「深い宗教教育」と、そして、ヴィヘルンが何よりも希求していたことであり、「そのホルンの施設が拠って立つ基盤にして、それが成し遂げた驚異の源」にほかならない、「家族の再現」である[11]。そのいずれをも、ドゥメスはみずから設立するメトレの施設に移植することになる。

奇跡の壁

ヴィヘルンから吸収したいくつもの秘訣をドメスがメトレにどのように生かしたのかはあらためて検討するが、そのうちのひとつにはここで注目しておきたい。それは、ラオエ・ハウスにとってもメトレにとっても、その代名詞であると

いってもよいような特性である。ヴィヘルンはそれを誇っている。

> この一年半、子どもがひとりとしてラオエ・ハウスから逃げだしていないという報告がされるのを見るのは、わたしにとってよろこばしい務めです。キリストの霊が住まう救護施設では壁がないということこそが堅固きわまる壁なのだと、またしても確証されたのです[12]。

収容施設でありながらラオエ・ハウスには内と外を隔てる壁はない。しかし、あるいはだからこそ、そこから逃げる者はいない。ドゥメスはそのことに感銘を受けたにちがいなく、メトレの周りにも壁は設けなかった。別稿で触れた[13]、フーコーの『監獄の誕生』の典拠である「メトレ感化院瞥見」でのデュクペシオによる解説は、ドゥメスの発想をなぞるものである。

> 壁も、囲いも、壕もなく、武器をもった警備もいない。コロニーは自分自身によって、そこに敷かれた規律の作用とその力のみで、守られている。空間に遮るものはなく、道は開け、院生は数歩踏みだせば自由を得ることができる。だが、彼は部署につく兵士のようにそこを動かない。彼の魂にはすでに名誉と義務の感情が呼び起こされていて、それこそが自分の周りに引かれた、心だけに見える枠のなかに、彼を引き留めるのである[14]。

ラオエ・ハウスの子はキリストの庇護のもとに留まることを選び、メトレの子は、忠実な兵士のように、あるいは「逃亡しないと誓った囚人 prisonnier sur parole[15]」として、名誉を重んじ、「信頼を裏切ることを卑劣な行為だと考える[16]」がゆえに、外の自由に向かって一歩踏みだすことを選ばない。メトレを訪れた国の高官が「奇妙な監獄だ、田園という鍵以外に鍵がないなんて[17]」という吃驚をもらしたことや、なぜ脱走しようと思わないのかと尋ねられた院生が、「だってメトレには壁がないから[18]」と、からくりの核心を突く答えを返したことを報告するドゥメスは、脱走者なしの報告を聞いてよろこんだヴィヘルンのよろこびを味わっている。『薔薇の奇蹟』で「メトレだけがその奇跡のような成功を享受していた[19]」とジャン・ジュネが語る、その壁の不在の「奇跡」は、あるいは存在していないのに存在している奇跡の壁は、ラオエ・ハウスから受け継いだもので

ある。

慧眼と創造

ラオエ・ハウスはたしかに、「探していた光[20]」をドゥメスにもたらした。それを天啓であるかのように物語る者もいる。

> 彼は探しているものをまだ見つけていないし、何を探さなければいけないのか、完璧な目標に達するにはどこから探し始めなければならないのかも、知らない。天におわして、彼を変わらずお導きくださる方のお力で、彼はそれを見つける。多くの試練と成果のない探求のあとで、ドゥメス氏は世界の「父」からのそのご褒美を受け取る。ドゥメス氏の旅の最後の日々のために、「父」はそれをとっておいてくださった。ドゥメス氏はハンブルクにいる。銀行家が彼に言う。「慈善施設への関心がそれほどお強いのでしたら、見捨てられた子どもたちを受け入れる、ラオエ・ハウスを訪ねるべきでしょうね。」彼は向かう。日の光が照り、彼の目は見開かれた。彼の魂のなかで慈善の火花が散って、それが炎となり、その炎は焼き尽くすのではなく、多くの人間たちを心地よく清らかな熱で包みつづけるだろう。「探していたものが見つかった！」と、彼は恍惚として言った。「決まりだ。ラオエ・ハウスを手本にしよう。いまからわたしの人生と、力という力は、見捨てられて犯罪に手を染めてしまう若者たちの救済と矯正に捧げられるのだ[21]！」

天上の父の導きを強調し、燃やさない炎までもちだすのだから、ドゥメスを預言者ないしキリストになぞらえようとする意図は見まがいようがない。しかしこれでは、ドゥメスとラオエ・ハウスの邂逅をあまりに重くとらえ、そしてメトレ創設を実現させたドゥメス自身の力量を見くびることになるだろう。実際には、先述のようにドゥメスは他の施設の失敗にも学びながら、もちろん成功に倣うことは厭わず、貪欲かつ冷静に、理想の施設の姿を探求している。デュクペシオはこう評価する。

> このように他国で得られた経験を利用して、入手した事実や結果を比べ、断

片的な要素を組み合わせるドゥメスは、その価値がすでに分かっている情報に基づいて、良いものは取り入れ、悪いもの、怪しいものは捨てながら、すばらしい仕事をすることができた。それが彼が驚くべき慧眼をもっておこなった業である[22]。

「慧眼 sagacité」を、ドゥメスがメトレ開設のさまざまな局面で発揮する「現実主義[23]」と言い換えてもよい。ラオエ・ハウスの発見が天からの「褒美」だったのだとしても、その贈り物は、他の施設の失敗と成功という別の贈り物といっしょに、ドゥメスの慧眼による比較と取捨と総合を経なければ、メトレへと窯変しなかったはずだ。なるほど、ドゥメスは多くを模倣した。しかし、その模倣はたんなる複製ではなく、それは「再び創造すること créer une seconde fois[24]」にほかならない。

監獄を憂う地主

教訓と手本を懐にして帰国したドゥメスは、満を持して新施設の実現に踏みこんでいく。そのためにまずしなければならないのは、どこにそれを設立するのかを決めることである。ヨーロッパ視察が教えてくれたように、どのような土地を耕すかに農業コロニーの成否はかかっているといってよい。決着に時間がかかることも覚悟しなければならない難問のはずだが、あにはからず、ドゥメスが長く頭を悩ませることはなかった。篤志家がヴィヘルンに「あばら家」を与えてくれたように、ドゥメスにも、絶好の場所を提供してくれる人物がいたのだ。ブレティニェール・ド・クルテイユ子爵である。

ルイ＝エルマン・ブレティニェール・ド・クルテイユ Louis-Hermann Brétignières de Courteilles は、1797年3月11日、パリで、ノルマンディ出身の裕福な貴族の家に生まれた[25]。1796年5月生まれのドゥメスとは、1歳とはちがわないことになる。コレージュ・ブルボンで学んだのもドゥメスと同じだが、当時のふたりがどの程度まで親しい仲だったのかはわからない。1813年、16歳のときにナポレオン軍に入り、すぐに同年のライプツィヒの戦いで武勇を示した。ナポレオン退位後も軍服を脱がず、1818年には中尉にまで昇進する。軍籍を離れるのは1820年で、その後は両親が所有していたメトレ村のプチ＝ボワ領地に身を落ち着け、

小作地の管理や、養蚕などに勤しんだ。そしてそのかたわらで多くの時間を割いて取り組んだのが、別稿で触れたように1830年代に議論百出していた、監獄改革問題だった[26]。

その関心が時勢に棹さすものであっても、けして軽佻ではなかったことは、ブレティニェール・ド・クルテイユが1838年に著した『受刑者と監獄、あるいは道徳、犯罪、監獄をめぐる改革』の真摯さに明らかである。彼を突き動かす問題意識は、次のように表明されている。

> 人類を苛む悪と混乱の実際の原因は、解決できない問題ではない。もたなければならない。その原因を粘り強く研究する力を。その原因を、誇張せず、しかし迷いなく語る良心的な気概を。そして、実践的な方法、簡単な、しかし英雄的な打開策は存在していて、良識と正義に差しだすことができるのだという内なる確信を[27]。

> 監獄は社会に影響を及ぼすのであって、監獄は罰にも矯正にもなっておらず、監獄は火に油を注いで腐敗を助長し、犯罪と堕落は監獄に待避場所を、悪の教えと手段を求めに来ていて、結局、悪の根源は増加する累犯にあるのだ、と言うのは、したがって、正しい[28]。

犯罪とりわけ累犯が社会を脅かしているということ、それと戦うにはそれが生まれる原因を根絶しなければならないということ、その原因のひとつが犯罪の学校と化している監獄であるということ。それらの認識は、同時代のほとんどの監獄改革論者たちの出発点でもあり、ドゥメスも例外ではなかった。さらに、ドゥメスがとりわけ青少年犯罪との戦いが喫緊だと考えるのならば、マドゥロネット刑務所を訪れ、収容されている子どもたちにとってそこが「徒刑場と中央刑務所のための苗床[29]」となっていることに愕然としたブレティニェール・ド・クルテイユも、それに同調するにしくはなかっただろう。現状への危機感と改革への意欲を共有することで、ブレティニェール・ド・クルテイユとドゥメスという若き日の同窓はあらためて交流を深め、頻繁に手紙をやりとりしながら意見交換をし、たがいの仕事について報告しあった。ドゥメスが非行少年更生のための施設発足に乗りだしたとき、ブレティニェール・ド・クルテイユが助力をためらうは

ずはなかった。

ブレティニェール・ド・クルテイユが所有するメトレ村の領地は拡大し、村全体1,722ヘクタールのうちの700ヘクタールを占めるまでになっていた。その一部について、1839年8月、ブレティニェール・ド・クルテイユは6年間の自由使用権を、しかも資金不足で計画が頓挫しないように無償で、新しい農業コロニーに与えた[30]。

緑陰を抜けて

「フランスの庭」と呼ばれ多くの王たちに愛されてきたトゥーレーヌ地方、現アンドル＝エ＝ロワール県に、メトレ村はある。パリからおよそ200キロの都市トゥールにほど近く、その北方8キロに位置している。なかば偶然に選ばれたにもかかわらず、それが僥倖であったとしかいえないほどに、ブレティニェール・ド・クルテイユが提供してくれた地は新施設に最適であるように思われた。

まず、パリとの距離が絶妙だった。それは「子どもたちが容易にパリに戻れないほどに遠いものである一方で、移動に莫大な費用がかからないほどには近いのである[31]」。そして、土地柄が申し分ない。「暮らしが穏やか、気候がきわめて健康的で温暖、土壌が肥沃で、耕作がしやすい」というのは、「子どものコロニー、すなわち、つらい開墾を企て実行するには脆弱にすぎる集団にとって、非常に重要なことである[32]」。しかも、見わたせば、そこは美しい。

> 一方を川で区切られたその土地には、水車が付属している。家を中腹に建てれば、そこからはきわめて心地よく、明媚な景色を見下ろすことになるだろう。その美しい土地の眺めは、子どもたちの想像力をおおいに刺激し、自分たちが耕して豊かにする土を彼らに愛させ、彼らの心に幸福な思い出を残すことになるだろう[33]。

メトレは大都市を遠ざけ、その土と水と空気によって浄化し、その美しさで感動と愛情と幸福を蘇らせる。メトレの地には、それがそれだけでも再生装置となることが期待されていた。

ルイーズ・コレは賛歌を捧げている。

彼らはどこに向かうのか、トゥーレーヌのなかを彼らはどこに向かうのか、
どんな鎖にもつながれていないその少年たちは。
彼らは驚きながら緑陰の下を駆け、
都会の害毒にまみれたまま着き、
しかし自然との幸福で健康な接触が
硬い心を融かし、罪の烙印を洗い、
血は静まり、心は花開いて、
彼らは生き返る‥‥‥新たな日の光がまばゆい[34]。

地上に緑まばゆい復活の楽園があるとすれば、それはメトレを措いてほかにない。

ブレティニェール・ド・クルテイユ

ところで、ブレティニェール・ド・クルテイユとは何者なのか。従来のメトレの歴史では、土地貸与者としての役割を果たして以降のブレティニェール・ド・クルテイユに焦点が絞られることは、ほぼない。なるほど、ラオエ・ハウスがなかったらメトレ感化院が存在しえなかっただろうように、慈善家の地主としてのブレティニェール・ド・クルテイユがいなければ、メトレは存在しえず、存在したとしてもそれはメトレとは別の場所に建つ、メトレの名を冠さない施設になっていただろう。しかし、メトレ感化院がブレティニェール・ド・クルテイユに負うものは、それにとどまらない。メトレ開設時だけではなく、開設後においてもブレティニェール・ド・クルテイユの貢献が多大なものだったことを、先取りしてここで知っておいてもよいだろう。

1839年に提示された内規案では、メトレは1名の院長の管理下に置かれることになっていた[35]。ところが、実際に稼働が始まると院長は2名いて、その後の毎年の年次報告書もふたりの連名で出されたのである。双頭の片方がドゥメスであるのはいうまでもないとして、もう一方がブレティニェール・ド・クルテイユだった。土地に対する謝意として与えられた肩書きばかりの院長などではなく、ブレティニェール・ド・クルテイユは実質的に院の舵取りに携わった。両院長のあ

いだに具体的にどのような役割分担があったのかは詳らかではないが、たとえば、院内の規律維持や院生の教練にブレティニェール・ド・クルテイユの軍歴がものをいったことは、想像に難くない。あるいは、院の運営、財政、規則についての綿密な記録を任されていたのもブレティニェール・ド・クルテイユであった可能性がある[36]。さらに、晩年体調が悪化するなかにあって、力を振り絞り大切な灌漑工事を監督するその姿が、報告されてもいる[37]。

ブレティニェール・ド・クルテイユが院生の日常と密にかかわっていたことは、たとえば彼の死に際してかつての院生が記していることからもうかがえる。

> メトレの子たち、僕は、僕たちみんなを襲った別れを知って苦しい。その別れは残酷で、同時に、取り返しがつかない。クルテイユさんがもういないなんて！　あの方は院の片方の腕だったのに、その腕がもがれてしまった。いま、それでも、天国からあの方は僕たちみんなを見守ってくださっている。でも、ぼくたちはあの方にもう会うことはなく、あの方はもうここにいない！　もう囚人や病人を慰めることがない、良い行いをするよう励ますことがない、どんな教練でも指示を出すことがない[38]。

慰撫し、激励し、訓練するブレティニェール・ド・クルテイユは、メトレの、頭という表現ではないが、かけがえのない両腕の片方だったと認められている。また、夭逝する、ある模範的な院生の末期にも、ブレティニェール・ド・クルテイユは登場する。

> 彼はうっすらと笑みを浮かべ、息絶える間際にあって、平穏がその表情全体に広がっていた。彼はこの上なく熱烈な魂がもつ純真無垢さで、死後の生について語っていた。周りにいる兄弟たちに、彼らを幸せにするためにこれほど労力を払ってくれる上の者たちに恭順と感謝を示すように諭し、彼らに向かって天を指す。彼は、父と呼ぶブレティニェール氏の腕に抱かれて死ぬことを望んだ[39]。

「キリスト教徒的な死に方[40]」に脚色されているのは明らかだとしても、そこで「父」の役割を担えるほどにブレティニェール・ド・クルテイユが院生にとっ

て威光をまとった存在であったことは、やはり疑いえない。

1852年9月10日、ルイ・ナポレオンが皇帝に即位する数ヶ月前、ブレティニェール・ド・クルテイユはメトレで没する。享年55だった。院内の墓地に埋葬され、墓碑には故人の願いどおりに、「わたしは彼らとともに生き、死に、復活することを望んだ[41]」、と刻まれた。ドゥメスはその死をこう悼んでいる。「クルテイユ氏を襲った死は、院からその盤石の支えを奪い、同時にわたしからは、愛情と誠実にあふれた友を、若き日からの古い伴侶を、神が与えてくださった血のつながらない弟を、奪った[42]」。ブレティニェール・ド・クルテイユが去った院長の座を誰かが継ぐことはなく、あるいは継ぐことができる者など誰もおらず、二頭体制は解消されて、ドゥメスはひとりきりの院長となった。

註

1 本論は次の2稿の続編である。「刻銘と心臓―メトレの誕生（1）」、『藝文研究』第119号第2分冊、2020年、p. (88)-(99)；「1840年1月22日まで（前編）―メトレの誕生（2）」『藝文研究』第121号第2分冊、2021年、p. (100)-(113)。なお、Demetzの日本語表記は、本論より「ドゥメツ」から「ドゥメス」に改めることにした。

2 Frédéric-Auguste Demetz, *Rapport sur les colonies agricoles, lu à la réunion internationale de charité*, Tours, Imprimerie de Ladevèze, 1855, p. 18-19.

3 *Id*., *Fondation d'une colonie agricole de jeunes détenus à Mettray*, Paris, B. Duprat, 1839, p. 19.

4 *Id*., *Rapport sur les colonies agricoles*, *op. cit*., p. 20.

5 *Id*., *Fondation d'une colonie agricole de jeunes détenus à Mettray*, *op. cit*., p. 8.

6 *Id*., *Rapport sur les colonies agricoles*, *op. cit*., p. 22.

7 ヴィヘルンとラオエ・ハウスについては、おもに次に拠った。大西勝也「ラオエス・ハウスの教育実践の根底にある教育理念について」、『大阪大学人間科学部紀要』第18号、1992年、p. 67-79 ; E. バイロイター「デイアコニーと近代における内国伝道の歴史　第5章」山城順訳、『地域総研紀要』第3巻第1号、2005年、p. 127-152 ; Jeroen J. H. Dekker, « Admiration et inspiration : Mettray dans le monde européen de l'éducation surveillée », dans *Éduquer et punir*, dir. Sophie Chassat, Luc Forlivesi et Georges-François Pottier, Rennes, Presses universitaires de Rennes, 2005, p. 225-238 ; Stéphane Douailler et Patrice Vermeren, « Les prisons paternelles ou le grand air des enfants pauvres », *Les Révoltes logiques*, n° 8/9, hiver 1979, p. 2-49.

8 Discours cité dans S. Douailler et P. Vermeren, art. cité, p. 18.

9 F.-A. Demetz, *Fondation d'une colonie agricole de jeunes détenus à Mettray*, *op. cit.*, p. 11.

10 Jacques Bourquin, « Le Mettray des origines », dans Raoul Léger, *La Colonie agricole et pénitentiaire de Mettray. Souvenir d'un colon. 1922-1927. Punir pour éduquer ?*, L'Harmattan, 1997, p. 114-115.

11 引用はいずれも F.-A. Demetz, *Rapport sur les colonies agricoles*, *op. cit.*, p. 23-24 より。

12 Discours cité dans S. Douailler et P. Vermeren, art. cité, p. 11.

13 前掲拙論「刻銘と心臓―メトレの誕生（1）」を参照。

14 Édouard Ducpetiaux, « Notice sur la colonie de Mettray, près de Tours (Département d'Indre-et-Loire) », dans *De la condition physique et morale des jeunes ouvriers et des moyens de l'améliorer*, t. II, appendice III, Bruxelles, Méline, Cans et compagnie, 1843, p. 365.

15 « Rapport des directeurs de la colonie »[1843], dans Colonie agricole de Mettray, *Assemblée générale des fondateurs, tenue, à Paris, le 12 mars 1843*, Paris, Imprimerie de H. Fournier, 1843, p. 16. « prisonnier sur parole » は、通常は仮釈放者のことを指す。

16 *Ibid.*, p. 16-17.

17 F.-A. Demetz, *La Colonie de Mettray*, extrait du *Journal des économistes*, du 15 janvier 1856, Batignolles, Typographie Hennuyer, 1856, p. 4.

18 « Rapport des directeurs de la colonie »[1843], rapport cité, p. 16.

19 Jean Genet, *Miracle de la rose* (1946), dans *Romans et poèmes*, éd. Emmanuelle Lambert, Gilles Philippe et Albert Dichy, Gallimard, coll. Pléiade, 2021, p. 330.

20 F.-A. Demetz, *Rapport sur les colonies agricoles*, *op. cit.*, p. 25.

21 Willem Hendrik Suringar, *Une visite à Mettray en 1845*, Leeuwarde, Imprimerie de G. T. N. Suringar, 1845, p. 2.

22 É. Ducpetiaux, *op. cit.*, p. 392.

23 前掲拙論「1840年1月22日まで（前編）―メトレの誕生（2）」、p. (109)。

24 É. Ducpetiaux, *op. cit.*, p. 392

25 ブレティニェール・ド・クルテイユの生涯については、おもに次に拠った。Jean-Michel Sieklucki, *La Colonie de Mettray. Un bagne d'enfants en Touraine ? Lumière et ombre*, Avon-les-Roches, Lamarque, 2019, p. 18-19.

26 前掲拙論「刻銘と心臓―メトレの誕生（1）」を参照。

27 Louis-Hermann Brétignières de Courteilles, *Les Condamnés et les prisons, ou Réforme morale, criminelle et pénitentiaire*, Paris, Perrotin, 1838, p. IV.

28 *Ibid.*, p. 118.

29 *Ibid.*, p. 239.

30 Philippe Saunier, « Voir Mettray : l'architecture de la colonie », dans *Éduquer et punir*, *op. cit.*, p. 125を参照。

31 F.-A. Demetz, *Fondation d'une colonie agricole de jeunes détenus à Mettray*, *op. cit.*, p. 18.

32 *Id*.

33 *Ibid*., p. 19.

34 Louise Colet, *La Colonie de Mettray : poëme*, Librairie nouvelle, 1852, p. 11. このコレの詩については、メトレを題材にした他の文学作品とともに、あらためて論じたい。

35 « Règlement de la colonie agricole de Mettray », art. 1er, dans F.-A. Demetz, *Fondation d'une colonie agricole de jeunes détenus à Mettray*, *op. cit*., p. 43.

36 Jacques Bourquin et Éric Pierre, « La colonie agricole de Mettray », *Sociétés & Représentations*, n° spécial : Michel Foucault. *Surveiller et punir* la prison vingt ans après, n° 3, 1996, p. 213, note 20を参照。

37 « Rapport du directeur de la colonie »[1853], dans Colonie agricole et pénitentiaire de Mettray, *Rapport annuel, adressé à MM. les membres de la Société paternelle, quatorzième année, Paris, au bureau de l'agence générale,* Tours, Imprimerie Ladevèze, 1853, p. 8.

38 Lettre du 27 septembre 1852, citée dans *ibid*., p. 15-16.

39 « Rapport des directeurs de la colonie »[1844], dans Colonie agricole et pénitentiaire de Mettray, *Assemblée générale des fondateurs, tenue à Paris, le 12 mai 1844, dans la salle du Trône, à l'Hôtel de Ville*, Paris, Imprimerie de H. Fournier, 1844, p. 22.

40 *Id*.

41 Société paternelle et Colonie agricole de Mettray, *Inauguration des bustes de MM. de Courteilles et De Metz, fondateurs de la colonie, 3 mai 1874*, Tours, Imprimerie Ladevèze, 1874, p. 12.

42 « Rapport du directeur de la colonie »[1853], rapport cité, p. 5.